

反キリストの権化「不法の人」の正体を暴く

不法の人を見極めるのが大切なのは、キリスト臨在の時を見極める重要なキーワードになるからです。「不法の人つまり滅びの子が表わし示されてからでなければ、それ（エホバの日、キリストの臨在）は来ない」（テサロニケ第二 2：3）と書かれているとおりです。さて、改めてこのテサロニケ第二の 2 章を順を追って、その内容を検討して見ましょう。

2：1「わたしたちの主イエス・キリストの臨在、またわたしたちがそのもとに集められることに関して、あなた方をお願いします。」

まず、パウロがここで述べようとしているのは「キリストの臨在」と「(真の) クリスマンが集められる」という二つの事柄が、同時点で成就するということです。

2：2「エホバの日が来ているという趣旨の靈感の表現や口伝えの音信によって、またわたしたちから出たかのような手紙によって、すぐに動揺して理性を失ったり、興奮したりすることのないようにしてください。」

「エホバの日」はもうすでに来ている、という霊の表明、人の言葉、しかるべき権威からの手紙などを真に受けて、うかつに信じ込んであわてたりしないようにという警告を告げます。

2：3「だれにも、またどんな方法によってもたぶらかされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が来て、不法の人つまり滅びの子が表わし示されてからでなければ、それは来ないからです。」

どれほど信用できると思える源だと思っても、どれほど、公に当然のように表明されたとしても、まず背教が来て、次に不法の人、滅びの子が登場していない限り、それ、「エホバの日」、が到来している、つまりキリストが臨在しており、真のクリスマンはその下に集めらるということは、生じ得ないと断言しています。

2：6「それで今あなた方は、抑制力となっているものについて知っています。それは、彼がその定めの際に表わし示されることを見越しているのです。」

パウロはテサロニケの兄弟たちに「あなた方は、抑制力となっているものについて知っている」と述べていますが、その実体を明らかにしていません。ですから後にこの聖句を読む人にはそれが何であるの分かりません。ともかく抑制力なるものが置かれるのは不法の人が定めの際、つまりエホバの日の始まる前、キリストの臨在前に、登場することを見越して設置されているということです。

2：7「確かに、この不法の秘事はすでに作用しています。しかしそれは、今のところ抑制力となっている者が除かれるまでのことなのです。」

確かに今、すでに「不法の秘事」は働いている。

(いつまでその「不法の秘事の働きは続くのか) 抑制力が除かれるまでのこと。

まさにその時(抑制力が除かれると)「不法の人」が現われます。

(つまり選手交代です。抑制力が保たれている間は、(それでも)「不法の秘事の作用」としてずっと働き続けますが)抑制力が除かれると、「不法の秘事」の働きは、その時までで終了し、それに替わって「不法の人(者)」が現われます。

ですから当然「不法の秘事」と「不法の人」はまったく別物です。

2：8「まさにその時になると、不法の者が表わし示されますが、主イエスはその者を、ご自分の口の霊によって除き去り、その臨在の顕現によってこれを無に至らせるのです。」
 将来のある時点で、不法の者が登場し、キリストはその臨在の顕現によって、それを滅ぼすということです。「顕現」とは「はっきりした形をとって現れること」という意味です。
 他の訳では「来られるときの御姿の輝かしい光」(新共同訳)「来臨の輝き」(新改訳)となっています。

2：9「しかし、不法の者が存在するのはサタンの働きによるのであり、それはあらゆる強力な業と偽りのしるしと異兆を伴い、・・・」
 不法の人はサタンによって存在するようになります。つまり自分の目的を達成するための手段であり、最終的な「蛇の胤」です。人の力では到底できない、超自然的な業を伴っています。

2：10「また、滅びゆく者たちに対するあらゆる不義の欺きを伴っています。彼らが[こうして滅びゆくのは]、真理への愛を受け入れず、救われようとしなかったことに対する応報としてなのです。」
 確かに不法の人はサタンの手先ですが、その存在目的、つまり、抑止力を敢えて取り除いてその者の登場を許すのは神の目的が関係しています。つまり、人々が本気で「救われよう」するかどうか、そしてそれは真理を愛する者かどうかによって示されるものだと言うことが分かります。

2：11,12「そのゆえに神は、誤りの働きを彼らのもとに至らせて、彼らが偽りを信じるようにするのであり、それは、彼らすべてが、真理を信じないで不義を喜びとしたことに対して裁きを受けるためです。」
 裁きの根拠を明確にするため、つまり、各人が自分から「救われようとしなかった」ゆえに滅びを被るということを明らかにするために、抑制力が取り除かれ、そして、その目的が果たされると、不法の人はキリストに無に帰されることになっています。

これが、パウロが述べている「不法の人」に関する説明です。
 さて、その実体を検討する上で先ず、明らかにしておかなければならない点がひとつあります。

これは、キリスト教に関するどの解説にも見られものですが、「不法の人」を「反キリスト」という語で表現している点です。

これは完全に間違いではありませんが、正しくありません。この点の捉えそこないが、様々な異説を生みだしているようです。

「不法の秘事(秘密)ギ語：ムーステリーオン(ミステリー)」と不法の人が交代することはすでに確認しました。

なぜ「不法の秘事」は席を譲り渡すのでしょうか。「不法の秘事は前座であり、不法の人は大御所だからです。言い換えれば、華々しくおもて舞台に登場するので、もう、秘事(秘密)ではなくなるからです。サタンは自分が地に投げ落とされてから、自分の分身とも言うべき「不法の人」を全身全霊を傾けてバックアツスすることになります。それはそれは完全にあからさまで、何の秘密ももういらぬのです。

「不法の人」は出張って来ることは留められているけど、秘密の作用くらいはできるのです。何しろ源はサタンですから。

ところで、「不法の秘事」として働いていた、その実体はなんでしょうか。

明白です。ヨハネが、「今でも多くの反キリストが現われています」と述べた人々による影響、つまり背教的な要素です。そしてヨハネはこう説明を加えます。

「イエスがキリストであることを否定する者でなければ、いったいだれが偽り者でしょうか。父とみ子を否む者、それが反キリスト（ギリ語：アンティ キリストス）です」
この説明から反キリストの一つの面が分かります。

否定する者もそうですが、ギリシャ語の元の言葉にはさらに別の意味も含まれています。

アンティ キリストスというのは、厳密には「キリストに反対する」という意味ではありません。

ギリシャ語の anti という言葉は、「反対」というよりむしろ「～に代わって」という意味が強い語句です。英語ですと、instead of～ になります。したがって、反キリストとは、「キリストに代わるもの」あるいは、「キリストの代替物」ということになります。

実際このアンチというギリシャ語が使われている他の聖句のほとんどはその語を「・・に代わって」と訳しています。

従って、正確に訳すと、「反キリスト」ではなく「擬似キリスト」「代替キリスト」と訳するのが本来の言語意味をもっともよく伝える訳と言えると思います。

というわけで、前述のテサロニケ人への手紙にあるように、「不法の人」は、自分こそが神であると主張する、あるいはキリストにしかできない事を行おうとする人間であり、「アンティキリストス」です。

さて、冒頭に挙げた問題点、「不法の人＝反キリスト」論は、正しくないと言った根拠はこれです。

反キリストは、1世紀当時から存在しました。そしてその数はその時ですら「多い」とヨハネは述べています。「反キリスト」は、それ以来歴史上いつでも、そして大勢存在します。

しかし「不法の人」は「彼がその定めの際に表わし示される」といわれているように、「主（エホバ）の日」を決定付ける、終末期に登場するものです。

もちろん、その言葉の意味から言って「不法の人」も「反キリスト」です

しかし逆は真ではありません。ですからイコールというのは間違いです。

「不法の人」は「反キリスト」の一人と言うより、「不法の人」こそ「反キリスト」の権化であると言えます

【権化： 性質・観念などが人間の形をして現れたかと思われる人。その特性の典型と思われる人。】

ここで「不法の人」に関する「ものみの塔」の見解を上げておきましょう。

*** 塔 90 2/1 10 ページ 3 節 11 ページ 8 節「不法の人」の実体を見極める ***
「1世紀において、この不法の者はすでに姿を現わしていました。

パウロはこの「人」がパウロの時代にも明確に存在し、エホバがこの体制の終わりに滅ぼす時まで存在し続けると述べているからです。ですから、この人は幾世紀にもわたって存在してきました。

それはだれのことですか。証拠が示すところによると、それは、幾世紀にもわたり、自分勝手な考えで自分を高めていた、尊大で野心的なキリスト教世界の僧職者たちの一団です。」

この引用はものみの塔 90 年からですが、洞察を含め 2009 年に至る最近の説明も同じです。

聖句には「パウロはこの「人」がパウロの時代にも明確に存在し、エホバがこの体制の終わりに滅ぼす時まで存在し続ける」などという事を示唆する記述はどこにもありません。

そもそも、パウロが、この一連の預言的警告を述べた理由は何でしたか。

この当時(西暦 51 年頃)エホバの日が来ているという趣旨の表明が至るところで飛び交っていたからに他なりません。それでパウロは、それは間違いであり、まだ将来のことであることを知らせる必要がありました。

もしすでに、このとき不法の人が現れていたなら、すでに、エホバの日は来ている事になります。そしてキリストの臨在も始まっていることになり、何もこんな警告は必要ありません。

この点は誰がどう読んでも一点の不明確な所はありません。

今は(一世紀)は「不法の人」が現れていないから、エホバの日ではないんです。パウロの訴えはこの一言に尽きます。

またこの当時、真のクリスチャンは会衆の中に集められていたので、「わたしたちがそのもとに集められる」必要のある状況にはありませんでした。

繰り返しになりますが、パウロは不法の人が、今存在していないので、体制の終わりは今ではなく、なお将来の事であると述べているのです。

ものみの塔は「抑止力となっているもの」は使徒たちであるとしています。彼らが去った後、不法の人は明確に存在するようになったと解説していますが、では使徒の最後のヨハネが死んだ後「エホバの日」が到来したのでしょうか。

不法の人の登場を許す目的は「神の裁き」のためであることが明確に述べられていることから、それは明らかに「終わりの日」に予定されていることと捕らえるべきではないのでしょうか。

さらに、不法の人が存在する、つまりその本来の役割を実際に果たしている時と「キリストの臨在」が同時期であることもはっきり述べています。

これは、キリストが臨在される時に、「選ばれた者たちを集める」つまり、言い換えれば、小麦と雑草が混ざった状態で、最後の審判の時まで続き、臨在された時に、まず雑草を集めて、焼き尽くした後、小麦の収穫、つまり、正真正銘の本物のクリスチャンがその下に集められるという聖書の他の預言とも一致します。

さて、いよいよその正体ですが、まず、現れるタイミングの前後の状況を考えます。

2：3で「まず背教が来て、不法の人つまり滅びの子が表わし示されてからでなければ、それ（エホバの日）は来ないからです」と述べられているように、「不法の人」の登場に前だつて「背教が来る」とあります。

この表現は、ある人々が「背教者になる」というような事ではなく、もっと大規模な「背教」という歴史の一時期を特徴付ける出来事が生じるという事でしょう。

先ず「背教」の意味をはつきりさせておきましょう。

「背教」。ギ語：アポスタシア。この名詞は、「離れて立つ」という動詞アフィステーミから派生しています。この名詞には、「遺棄、放棄、反逆」という意味があります。

この種の大々的な「背教」がいつどの時点で生じるかについて、ダニエル8章の「小さな角」が引き起こす事柄に注目できます。

(これらの詳しい解説については「70周年の預言についての考察」及び「ダニエル8章の『2300日』に関する考察」をご覧ください。)

「軍勢は渡され、常供のささげ物に代えてそむきの罪がささげられた。」(ダニエル 8:12 新改訳)

「さらに、軍そのもの、そして常供のものも共に徐々に引き渡されていった。それは違犯のためであった。」(ダニエル 8:12 新世界訳)

常供の捧げ物に代えて「背きの罪」が捧げられるのですから、捧げているのは、神の崇拝者であつて、「小さな角」ではありません。なぜなら、そもそも本来神の崇拝者でないものの犯罪は、「背き」の罪ではなく、単なる、冒瀆、敵対でしかないからです。

従つてこれは、クリスチャンたちの内の妥協した人々、もしくは偽預言者によって惑わされ、小さな角をメシアとして積極的に受け入れた人々によって捧げられるのでしよう。

従つて、13節前半の「常供のささげ物や、あの荒らす者のするそむきの罪」という表現は厳密には「荒らす者に」による行動の結果としての神の民の「常供のささげ物」の廃止と、「荒らす者」の行動の結果として、代替物として「そむきの罪」が同じ神の民によって捧げられることになるという事でしょう。

すなわち、「不法の人」の出現の前に生じる大規模な「背教」は、「荒廃をもたらすもの」の「契約」を結ぶことによる惑わしの影響の結果生じると考えられます。

これはまさしく「大いなる背教です」

したがつて、「不法の人」とは「ダニエル書で言及される」「荒廃をもたらすもの」「小さい角」と同一人物でしょう。

この者は、70週の最後の1週の間、暗躍しますが、週の半ばに、「常供のものを絶えさせ」その時以来、おもて舞台に登場し、後半の3時半、1260日、42ヶ月間、「不法の人」として現れます。

他の聖句からこのことをさらに確証してみましょう。

不法の人をその特徴から見分ける

生み出す実によって「不法の人」かどうか見分ける事ができるでしょう。「アンティ ク
リストス」の特徴をパウロはこう表現しています。

(テサロニケ第二 2:4、9)「それはあらゆる強力な業と偽りのしるしと異兆を伴い、…
彼は、すべて「神」と呼ばれる者また崇敬の対象とされるものに逆らい、自分をその上
に高め、こうして神の神殿に座し、自分を神として公に示します。」

超自然的なしるしを行い、自らをキリストに変容させて惑わそうとする、これらの特徴
を他の預言と比較してみましょう。

(ダニエル 11:36)「そして、その王はまさに自分の意のままに事を行ない、自分を高め、
自分を大いなるものとしてあらゆる神の上に高める。また、神々の神たる者に向かって
驚くべきことを語る。」

(ダニエル 8:23 - 25)「彼らの治世の終わりに、彼らのそむきが窮まるとき、横柄で狡
猾なひとりの王が立つ。彼の力は強くなるが、彼自身の力によるのではない。彼は、あ
きれ果てるような破壊を行ない、事をなして成功し、有力者たちと聖徒の民を滅ぼす。
彼は悪巧みによって欺きをその手で成功させ、心は高ぶり、不意に多くの人を滅ぼし、
君の君に向かって立ち上がる。」

(ダニエル 8:10 - 12)「そしてそれ（小さい角）は天の軍に達するまでに大きくなって
いき、…そして、その軍の君に対してまでそれは大いに高ぶり、その方から常供のもの
が取り去られた。また、その方の聖なる所の定まった場所は打ち捨てられた。さらに、
軍そのもの、そして常供のものも共に徐々に引き渡されていった。それは違犯のためで
あった。それは真理を地に投げつけてゆき、行動して成功を得た。」

さて、最後に、その出現を留めている「抑止力」とそれが解かれる「時」について考察します。

「今あなた方は、抑制力となっているものについて知っています。それは、彼がその定め
の時に表わし示されることを見越しているのです。確かに、この不法の秘事はすでに作用
しています。しかしそれは、今のところ抑制力となっている者が除かれるまでのことな
のです。」(テサロニケ第二 2:6.7)

新世界訳では、6節と7節に出てくる、「抑止力」の後をひらがなの「もの」と漢字の「者」
とに訳し分けていますが、たぶん誰一人気付かないでしょう。

「抑制力となっているもの」 τὸ κατέχον(ト カテコーン) 中性 (抑制物)

「抑制力となっている者」ὁ κατέχων(ホ カテコーン) 男性 (抑制者)

6節の方は、その働きというか取り決めと言うか、そういう原理が働いていると言うことを示しているのでしょう。

そして7節では、もう少し分かりやすく、それを具体化させた人格的存在を差し示していると言えます。

また「不法の者が存在するのはサタンの働きによる」とありますから、実際に押しとどめている者は、単なる人間でなくサタンそのものを押さえおくことのできる者でなければなりません。

よほどのパワーを持ってしなければ、到底制する事はできないでしょう。

この事を考えれば、その「抑制力となっている者」ὁ κατέχων(ホ カテコーン) はみ使い以外にはあり得ないでしょう。

そして実際に、「荒廃をもたらす嫌悪すべきもの」が据えられる時点、3時半の始まりの時点である第6のラッパが吹かれた時、その抑制者が解かれることが黙示録の中で示されています。

(啓示 9:15)「その四人のみ使いがほどかれた。彼らは、人々の三分之一を殺すため、その時刻と日と月と年のために用意されていたのである。」

これは単に神が時間厳守の神であるという意味だけで記されているとは思えません。それは、この句に限らず、全てに言える事だからです。

「何年何月何日何時」とあらかじめ定められていた、まさにそのために用意されていたことがらであるとういことです。

いつから用意されていたのでしょうか。なぜ、この句だけにとりわけ「思い入れ」が深いかのような印象で記しているのでしょうか。

それは、待ちに待った、ある、極めて重要な、定められたある時点に「解き放す」べきものがあつたということでしょう。

ですから、このユーフラテスにつながれていた4人のみ使いの解放はまさしく「満を持して登場」したといえるのでしょう。

「満を持して」の意味はこういうものです。

(1) 弓をいっぱい引きしぼる。十分に用意して機会を待つ。満を持する。

(2) 物事が絶頂に達し、その状態を保つ。

そもそも、「満」という字そのものに「弓を一杯に引いた状態」という意味があるそうで、そのまま、手を放して矢を射るまで、ずうっと気を緩めずに保つと言うのが、「満を持して」です。そして「ここぞ」と言うときに放たれます。

それまでの間、ずっと満身の力を込めて、手元に引き留め続けておかなければならないのです。

そのような者を聖書中に思い当たるとすれば、ただ一つ「不法の人」を留めている者し

かないでしょう。その出現を押しとどめ続けた「抑制力」こそこの4人のみ使いでしょう。強力なものであるサタンを留めるために4人のみ使いが任命されているのでしょう。

この4人のみ使いがなぜ「ユーフラテス」につながっていたのかと言うことですが、「不法の人」の実体は、「小さい角」であるとはすでに述べましたが、これは、ダニエル8章によれば、ギリシャ帝国の四つの領土の一つから起こるとされ、そしてそれは、シリアのアンティオコス4世エピファネスとして、小規模に成就しました。つまり、「不法の人」が留められている場所は、象徴的に「シリア」近辺と言えます。終末の成就においての、この者の具体的な国籍は分かりませんが、古代ギリシャ帝国の領土からの者であることは、聖書預言がはっきり示しています。



ユーフラテス川の地域で、その出現を阻止しているということですから、関わっているのと思える国は、現代のシリア、イラク辺りに相当します。あるいは、ユーフラテスを渡るのが遮られているとすれば、それより以北ということになります。いずれにしても、この解禁により、不法の人、滅びの子、荒廃をもたらす嫌悪すべきものが表し示されることになるのでしょう。